

生徒からみた音楽指導上の問題点

佐伯正一

I ま え が き

前の「生徒は芸能、家庭科をどのように考えているか」の報告によるように、音楽科に対する重要性をかなり軽く考えているので、それだけ国社数…等の教科に比べて、指導上困難な問題があるのではないかと考えた。つまり生徒の積極的な学習意欲をもう上げるためには、他教科でもそうであるが、特にこの教科においては興味と自覚という点に重点をおかなければ救い難いと考えたのである。それにはこの音楽学習の各作業（歌唱、鑑賞等）を生徒はどのように感じ、どのように考えているのか、この事が指導上の問題点を明かにする鍵となるのではないかと考えたので、ここに次のような調査を行った次第である。

調査人員は中学1.2.3年の全中学生308名について行った。

この調査は発表のための研究ではなくてわたくしの反省のための資料として調査したものであるから、研究発表の資料としては不十分である事は認めているので、その点御諒承いただきたいと思っている。

II 問 題 点

1. 授業中における音楽に対する興味

表 1

		中一	中二	中三	計	合計	%
1	やさしいので努力しない	男 0 女 0	1 0	1 0	2 0	2	70
2	好きだから学習が楽しい	男 27 女 45	25 37	27 36	79 118	197	
3	興味が無いが大切だから努力しようと思う	男 3 女 3	4 2	1 4	8 9	17	30
4	興味が無いから努力する気がしない	男 15 女 1	14 1	5 3	34 5	39	
5	努力しても駄目だから諦めている	男 1 女 0	3 0	4 5	8 5	13	
6	学習が面白くないから努力する気がしない	男 6 女 2	8 8	13 3	27 13	40	

この表1で考えられる問題点は4.5.6の項で30%もいることである。特に4項の場合は中1中2の男子が最も数が多いのは変声期からくる問題であることが想像されるし、以下の調査によっても明かになると思う。次に6項には指導上の問題もあるが、音楽それ自体に興味を持たないために学習の面白くないという生徒のあることも考えられるのである。いずれにしてもこの原因については詳細に探究してみたいと思っている。

2. 授業中における歌唱について

表 2

		中一	中二	中三	計	合計	%
1	何時でも歌いたい気がする	男 29 女 36	18 27	18 27	65 90	155	50
2	時には歌いたくないこともある	男 14 女 14	27 20	26 22	67 56	123	40
3	何時でも歌いたくない	男 8 女 1	10 1	7 2	26 4	30	10

表2でみると、3項が問題で、何時でも歌いたくない者が全体の10%とはいえ、この位の数字は当然の事としておくことの出来ないものがある。何とか救う道がないものか。ここに問題点がある。この2項3項についてその生徒の考えている理由を挙げてみよう。

2項の理由(123名について)

表 3 (実数)

イ. 気分の悪い時(体、面白くないことがあった時、試験の前)	51
ロ. 声が出ない時(高い声、調節がとれない)	31
ハ. 曲が単調な時	11
ニ. 曲がむづかしい時	9
ホ. 先生のきげんの悪い時	6
ヘ. 練習が足りない時	6
ト. その他 同じ処を何度も歌われた時、外が騒がしい時 階名がよめない時、劣等感を感じた時 緊張させられた時	各 1

上の表3で分るように、気分の悪い時が最も多いつまり歌唱には精神的に可なり大きく影響されているということが、この年代をよく理解していれば、大体想像されるころではあるが、われわれのよく忘れ勝ちで教育者自身の一方的な指導によって過まられ易い点として注目すべきではないかと思っている。又、ト項のように数字では小さいがどれも、小さい問題とはいえ指導上において考えさせられる点ではないかと思う。

3項の理由(30名について)を表4でみると、

表 4 (実数)

イ. 声が悪くて出ない	15
ロ. 音程がはずれる(音痴)	7
ハ. 下手だから	5
ニ. その他	
嫌いだから、緊張させられる	各 1
譜に対する基礎がわからない	

ここでは当然のことで、変声期のためと、それからくる精神的影響が考えられる。

3. 授業中におけるレコード鑑賞について

表 5 (実数)

A 楽しい場合	
1. 好きな曲	102
2. 静かな時	63
3. きいたことのある曲	47
4. 軽快な明るい曲	32
5. 新しい曲	13
6. 気分のいい時	10
7. 沢山の曲をきいた時	6

B 楽しくない場合	
1. 騒がしい時(内、外)	117
2. 知らない、むづかしい、わからない曲	33
3. 長いゆっくりした曲	32
4. 気分の悪い時	31
5. きらいな曲	29
6. 試験の時	12
7. 曲の途中で切られる時	9

上の表5の項目はこちらの指定ではなくて生徒が自由に書いたのをまとめたものである。Bの場合の1項は、この学校の音楽室の環境が悪く横の

道を通る車の雑音からくる影響を強く現わしているのである。3項以下は大体精神的影響からくると考えていいのではないか。歌唱の場合と同じく精神的な影響を取り挙げて考えるべきではないか。

4. 音楽学習の難易と興味について

表 6 A. 難易

		中一	中二	中三	計	合計	%
1	むづかしい学科だと思ふ	男 17 女 8	14 15	19 15	50 38	88	29
2	それ程むづかしい学科とは思わない	男 29 女 36	23 25	22 22	74 83	157	51
3	何とも思わない	男 7 女 7	17 8	10 14	34 29	63	20

B. 興味

		中一	中二	中三	計	合計	%
1	面白くない退屈な学科だと思ふ	男 4 女 0	12 2	6 4	22 6	28	9
2	割合に面白い学科だと思ふ	男 43 女 46	37 40	40 42	120 128	248	81
3	何とも思わない	男 6 女 5	5 6	5 5	16 16	32	10

表6 Aの難易の場合、1項が問題であってその理由は調べていないが、30%もあるということが問題で、理由の想像される点は、変声期のための歌唱の困難と理論が俗に理論のための理論であったりして音に結びついていないか、又は、結びついていたとしても、その必要性を自覚する指導に欠けていたのではないか、その点に問題がある。

表6 Bの興味の場合、1項が問題であって、女子に比べて男子が圧倒的に多い。これは変声期から来た問題であると一応考えられる。この問題の処理は仲々大きい問題であるので、簡単に解決法が考えられるとは思わないが、音楽教育の最も大きい問題として考えてみたいと思っている。変声期の問題は多年多くの人達に研究されてなお未解決のままであるが、この点、生徒の実態から割り出した方法が考えられるのではないかと思っている。指導法は私達教育者が創作するのではなくて生徒に教えられるのであると思つてこの方法を取ってみたいと思う。

5. 音楽生活について

生徒からみた音楽指導上の問題点

表 7

		問題の数			計	合計	%	
		中一	中二	中三				
1	日頃音楽で楽しい時を過している	男	15	8	15	38	120	39
		女	28	31	23			
2	音楽によって時々楽しい時を過す	男	29	43	29	101	164	54
		女	23	17	23			
3	音楽によって楽しい時を過したことは殆んどない	男	9	3	7	19	24	7
		女	0	0	5			

表7についてみると、3項が問題で、男子がその8割を占めている、これは俗にいわれてきた芸能は女子のものという旧観念の影響だとして片付けられない。わたくしはこれは矢張り、変声期に関係があるという考えを出発点としてみたいと思っている。

6. 通知簿の評価にどのように影響されるか

(表8)

表 8

		問題の数			計	合計	%	
		中一	中二	中三				
1	成績が悪ければ嫌いになる、よければ好きになる	男	8	10	10	28	65	21
		女	6	16	15			
2	成績が悪ければもっと努力しなければならぬと思う	男	30	14	17	61	123	40
		女	35	14	13			
3	成績がよくても悪くても好き嫌いに関係がない	男	15	30	24	69	120	39
		女	10	18	23			

この場合1項が問題点であるが、これは相対評価の場合における調査であるから、この方法における欠点として現われてきたのではないかと、勿論これだけだと即断は出来ないが、しかし、音楽の評価は、才能と努力の上に立った客観的資料によれば絶対評価の方がよいのではないかと思った。

7. 指導上特に問題になる点

表 9

問題の内容	問題の数	人数					(イ) 1つの問題を持つ者					(ロ) 2つ兼ねて問題を持つ者					(ハ) 3つ兼ねて問題を持つ者	
		17	2	35	2	11	8	2	1	6	4	10	2	3				
表1	4	○					○											○
	5		○					○										○
	6			○					○	○								
表6	B.1				○						○	○						○
表7	3					○	○	○	○									○

表9についてIからVまでの中で特に問題になる点を個人として合せて考えてみた。(イ)は(イ)としておのおの問題を持っているし、(ロ)は2つも問題があるが、最も問題になるのは(ハ)の5名であるので、音楽から全く切り離されている感じである。これ等の生徒の音楽に求めるものは何か、そしてどうして与えるべきか、又どうして救うべきかわたくしに大きな重い課題として残された。次の機会にあい路打解の糸口が得られれば幸である。

III 結 語

中学時代全般に拡がっている変声期という暗雲は生徒の音楽学習の至る処に障壁として現われているこの事実を見逃がすことは出来ない。ここから中学の音楽教育のあり方が出発しなければならぬのではないかと。この問題は単なる経験とか観念だけでは片づけられない。

これは決して新しい問題ではない。むしろ最も古い問題であるが、未解決の問題として又最も新しい問題でなければならない。この指導法は、原理の上に立った指導法よりも(勿論必要ではあるが)むしろ生徒の実態の上に立った指導法を考えるべきだと考えている。生徒の実態とは何か、実に複雑だと思う。次の機会に考えてみたいと思っている。何れにしてもそのことがこの低迷した問題を一步前進するとすれば幸である。

次に起る問題は芸術を尊重し愛好する心である。芸術という言葉は中学生に適當でなければ、よい音楽を尊ぶ心、愛好する心をどうして育てればよいかということである。

各 個 研 究

またこの度の調査にも現われているように、この年代の特徴である情緒不安定からくる学習への影響である。ただでさえ、不安定な生徒に対して、一方的な指導がいかに危険であるか、この不安定が学習の障壁になっていることも見逃せないと思っている。ここに生徒の精神的実態をつかん

で、その上に立った指導法を考えていかなければならないと思っている。

いずれにしてもこれらはすべて開拓的な仕事でこの考え方から何が生れ、どんな花が咲くかは今後の問題であるとしても、とにかくここから何か新しいものが生れるのではないかとと思っている。